

平安時代の着物がほかの時代に比べて、より特徴
的なのはなぜか。

2025 年 1 月 14 日

3 年〇組〇番 〇〇 〇〇

3 年〇組〇番 〇〇 〇〇

3 年〇組〇番 〇〇 〇〇

1 問いの背景

私たちの班は、平安時代や衣服について興味を持った三人が集まった。

一人目……平安時代の政治と現代の日本の政治の差を調べていた。その過程で、身分の差が気になり始め、さらに、上の位の人が、何かあった時に逃げにくいはずの重たい着物をいつも着ていることに疑問を持った。

二人目……毎日、私たちは服を選ぶ際に季節や気分によって、今日着るものを選び、好きなものを合わせる。しかし、平安の人の衣服を見たときに、重ねの色がひとりひとり、一枚一枚違うことに気が付き、何か意味があるのだろうか、と思った。

三人目……『かぐや姫』が好きで、そこから平安貴族がどのように暮らしていて、どんなことを思っていたのかが気になり、その時代の文献から読み取り、考えたいと思った。

私たちは平安時代について興味を持っており、また着物も共通していることがわかった。着物について話し合いをし、平安時代の着物には十二単があり、様々な色で重ね着をしていることから平安時代ならではの色の意味や特徴的な時代背景があったのではと考えた。まず、特徴的である定義として、平安の着物である十二単は帯がなく、丈が長く、重ね着の量が多くなっていることが挙げられる。

2 先行研究

これに関する先行研究をしていた加藤万由里は、「平安時代から庶民と貴族の衣服に差がみられ始めている」と述べた。平安時代、朝廷は唐から輸入した律令制を取り入れ、天皇中心である政治体制を強めた。神話の時代の神の一族の末裔として君臨していた朝廷と、由緒ある家系の貴族が力を強めたことから平民との格差が大きくなっていったと思われる。平民との区別をつけるため、貴族の着物はより豪華になっていった。遣唐使の廃止により国内で特有の装束が生まれ、日本独自の文化が花開くこととなる。かつて日本は遣唐使の廃止が起るまで中国から輸入した衣服を身に纏っていた。権力を誇示するものとして服が重要であることはあきらかであるが、庶民との違いはどんなものであったのか。平安やそれ以前でどんな意味合いがあったのかを調べた。私たちは、比較のために前の時代、飛鳥時代の着物を

比較の対象とした。

飛鳥時代の着物は隋や唐の服装と比較すれば、大きな違いはさほどなくほぼ同じであった。万葉のファッションという論文によれば、飛鳥時代の服装は朝鮮半島のカヤという国から影響を受けていたとのことだ。朝鮮半島は古くから中国の属国として位置し、日本との交流もあったはずだ。アジアで高い権威を誇る中国の文化や建造物を手本としていた日本にとっては、カヤの服装を見習うのは当然かもしれない。

平安時代に大きく日本風へと変わった理由として、894 年の遣唐使の廃止が挙げられた。廃止から日本は独自の文化（国風文化）へと変わっていくのだ。このことから、日本が飛鳥時代から服装が大きく変わった理由として、中国の衰退による遣唐使の廃止が、着物が特徴的である理由のひとつと言えるだろう。

私たちは、時代の背景からも特徴的である理由を考えた。十二単は非常に重く、女性は歩くのにも一苦労だったことが推測できる。女性は特別な催しなどがない場合、たいていは自宅にて夫の帰りを待ち、誰かに仕えていれば主人の身の回りの世話などを行っていたのではないだろうか。このころの宮中や貴族の出身の女性は、激しく動く必要がある場面はかなり少なく、それこそ非常事態などでなければなおさらだ。

3 新たな問い

彼女たちは非常事態に陥った時どうしていたのだろうか。わたしたちに新たな問いが生まれた。そこで、非常事態（火災）ではどうするのか資料を集めた。

まず、どうやって火が燃え広がるかを調べた。平安時代の建造物は木造でできている。屋根は檜皮葺（ひわだぶき）で、檜の樹皮を用いて造られていて、屋根も同様に檜であった。また、都の場所が盆地であるため湿度が高く、床下や天井が風通しのために高くつくられていて、通気性の高さがゆえに、燃焼速度は非常に速かったと思われる。屋根も火の粉が飛んできてしまえば、すぐに炎上してしまっていたようだ。

火の燃焼速度は完全木造であると、20 分前後で燃え尽きてしまう。また、出火してから 2

分程度で壁板や障子、ふすまなどに燃え移ってしまうようだ。天井に燃え移るまでは2分30秒前後であり、出火の場所によってはより早く燃え広がってしまい、5分後には出火の部屋は火の海になる。出火の場所や状態によっては貴族が住んでいた寝殿造の建物は2階が無い場合もあり、火が移り、全焼したと考えられる。

そして寝殿造の構造からも火の移り方を考えた。寝殿造はとても開放的である。イメージすると『体育館のような大きな建物の壁を全て取っ払い、中をパーティションで仕切って部屋にしていた建物が2～3棟の廊下で繋がっている状態』だ。このような造りをしているため1つの建物に貴族が20～30居住していたと言われている。しかし壁がなく、冬など夜は火を焚いても部屋が暖められなかったとも言われていた。少しの火を焚いても暖まらなかったということはより多く焚いていたかもしれないと考えた。そのため、盗賊などが火をつけなくとも、暖を取るためにつけた火が誤ってどこかに引火してしまう可能性も高いと考えた。この事を調べ、私たちは、寝殿造は高さがあり、細長い廊下が印象的だと結論つけた。そのため現在の家よりより炎の燃焼速度を高めている。またそれと共に、壁がなくすだれなどで仕切っているため燃え広がりはとても早い。果たして、現代の裸木造の場合、3分程で天井に火が到達するのに現代のように素早く歩いたり走ったりしないでであろう平安時代の十二単を身につけていた人は3分以内に全員逃げられたのか。

平安時代の火災のあるエピソードが書かれた資料から、このようなことがわかった。1040年9月、土御門内裏での火災についてのエピソード。警備していた下級役人が火災を発見し消火活動に当たったが、上層部からストップがかかったそう。その理由は「神聖な御所に不浄な池の水をかけるのはいかなものか。この行為の吉凶を（占いによる判断）していない。あたら御所を穢してしまわぬよう、このまま火が消えるのを待つべきである」という考えがあり結局、御所はすっかり焼け落ちてしまったそう。

この時代は、不浄な状態で保たれるくらいなら、清浄な状態で焼け落ちた方がマシというのが平安貴族の美学であったこと、全てのことを占いで決めるという文化があり、「池の水を消火に使うのは吉か凶か」と占い、是が非でも「吉」が出てやっと消火活動ができたそう。そのため、消火活動を積極的にしようとは考えなかったのかも知れない。この資料を見て私たちは現代と平安時代の価値観の差を大きく感じた。

そしてこの価値観の違いをデータで見るため、アンケートを取った。

4 アンケート結果

アンケートでは、「もし、火災現場に取り残されたら、あなたならどうするか（二択：何としても逃げる：助けを待つ）」と「非常時に一つ何か持っていけるとしたら、何を持っていくか」を聞いた。アンケート結果は下記の通りだ。

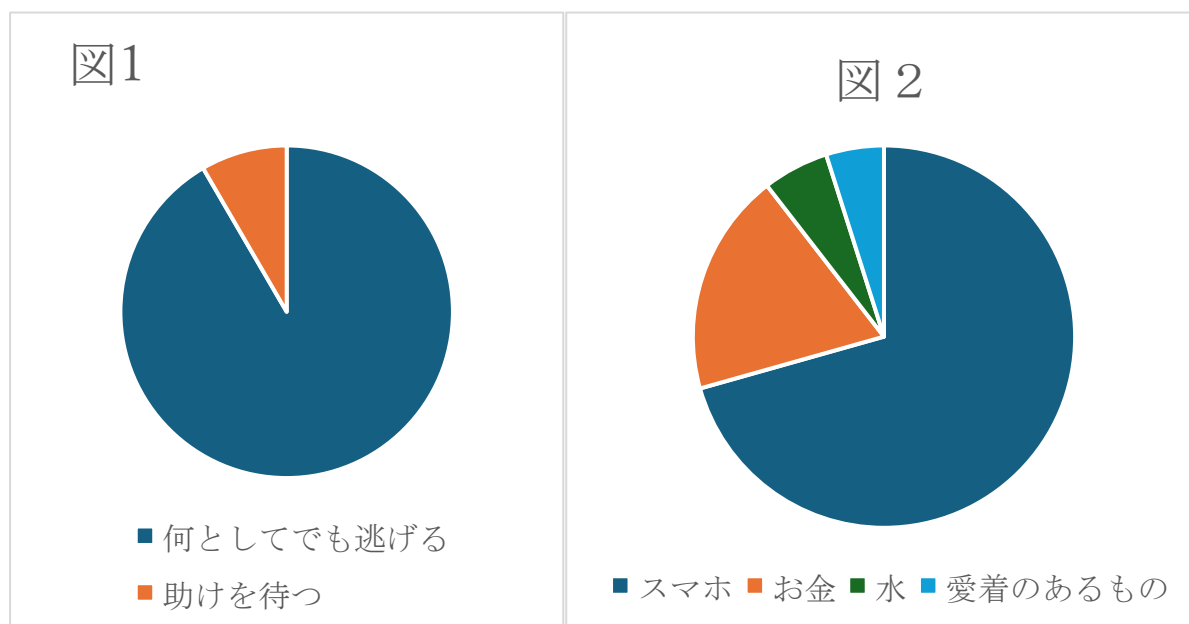


図1のグラフは「もし逃げる状況になったとき（火災など）自分が動けない状態でも何としても逃げるか、助けを待つか」というアンケート結果だ。結果、143人中131人が何としても逃げる、残りの12人が助けを待つと答えた。

図2のグラフでは「非常時に何か一つ持って逃げられるならあなたはなにをもっていくのか」というアンケート結果。結果、143人中101人の人がスマホ、27人がお金、8人が水、7人が愛着のあるもの（ぬいぐるみなど）と答えた。

5 結論

アンケートの結果にあるように、現代、私たちは「自分の命優先」「連絡手段や金銭、思い出深いものを大切に」という価値観のもと日々暮らしを送っている。自分の命を優先するという、平安の穢れを忌み嫌う風習とは大きく違う。穢れを残すくらいならいっそ、と考えていた平安時代だが、現代では穢れなど宗教的な考えを自らの命よりも前にもってくることは、多くの日本人の場合ないのではないかと思います。連絡手段や金銭を持って出る人が多いのは、それがあれば何とかなるだろうという、現代日本の制度の整備や情報通信技術の発達による安心感が大きいのではないだろうか。「思い出深いもの」とは人それぞれであるが、大きすぎて持ち運べない、などの不可能がない限り、皆持って逃げたいと考えるだろう。小さいころからのものや、母や父などの形見や嫁入り道具など、そういうものを日本人は大切にしている。それは古くからある「アニミズム」の考えからくるのではないだろうか。万

物には神が宿る。古いものには神が宿る。大切にしているものには意思が宿る。多くそんな言葉が現代までのこっている。平安から変わったものは数多くあるけれど、日本の良い考えは、現代まで受け継がれているようだ。

6 感想

私たちの共通の興味から平安時代についてたくさん思考をした。

平安時代の人々は、火事の際に助けられる人が助けるというのではなく、もし貴族の人の家が火事になっており、近くにある池の水で火を消そうとしても、身分の差や宗教の違いなどから命がなくなっても不浄な水で家が汚れるならきれいなままのほうが良いという考え方は現代の考え方では理解することは難しかった。現代であれば着ている服を変えたり、対策を考えたりするが、平安時代は価値観の違いから命の危機の出来事が起きたとしても重い着物を変えることはないと考えた。だが現代の考え方との違いを理解して問いを新たに作るなどしていったことで論文を進めていくことが出来た。

また論文を書いていく上で、初めてということもあり、文の構成や言葉の使い方などが分からず、うまくいかないこともあり大変だったけれど、同じ班の子と問いを立て何回も考えてやり直していき後半はスムーズに作成していくことが出来た。

7 参考文献

加納 万由奈(2023) 着物の歴史 ―日本女性服飾の移り変わり―No. 11

[それ、火を消すより大事なの？平安京の火災と貴族たちの反応にびっくり - Japaaan](#)

[火災の防災について 火事の燃え広がり方 - 宮崎県国富町ホームページ](#)

「天徳四年・内裏炎上」[009.pdf](#)